

「ピロリ菌と血液疾患」

胃潰瘍や胃がんなどに関連があることが知られている「ピロリ菌」ですが、あまり知られていない血液疾患との関わりがあります。今回は「ピロリ菌と血液疾患」についてお聞きしました。

ピロリ菌とはどのような病原体ですか？

胃の中には胃酸があるため、以前は無菌であると考えられていましたが、1982年に胃の中で生息するらせん形の細菌が発見されました。これがピロリ菌です。いろいろな研究から、この菌が胃、十二指腸潰瘍や胃がんなどと深く関わっていることが分かっています。また近年、胃以外の疾患（動脈硬化、尋麻疹、糖尿病、自己免疫疾患など）でも関連が疑わ

れています。さらに血液内科領域の病気にも大きく関わっていることをご存じでしょうか。

血液疾患としてどのような病気と関連するのですか？

一つ目は、悪性リンパ腫の中の一病型である胃マルトリンパ腫です。胃粘膜に発生し、ゆっくりと発育する悪性度の低いリンパ腫です。ピロリ菌感染者で、マルトリンパ腫が胃に限局している場合は最初に除菌を行います。その有効率は50〜80%と高く、数か月から

数年でリンパ腫が縮小、消失します。悪性腫瘍が、除菌治療でよくなってしまうというのは大変不思議なことです。

次に鉄欠乏性貧血です。鉄欠乏性貧血は最もよくみられる血液疾患の一つであり、原因として消化管出血、婦人科的出血、鉄吸収障害などがありますが、消化管内視鏡、CT等で調べてもしばしば原因不明で、鉄剤治療をしても増悪を繰り返すことがあります。こうした鉄欠乏性貧血でピロリ菌陽性の患者さんに除菌療法を行うと貧血が治ったという報告が増えてき

ピロリ菌はどのように検査すればよいのですか？

ピロリ菌の検査は外来で簡単にできます。胃カメラ検査の際に、胃の一部を採取する生検を用いてウレアーゼ試験、病理診断や培養検査を行います。また血液検査、尿で抗体を測定、便による抗原検査、呼吸テストなどがあります。

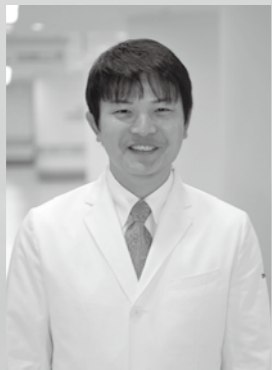
ピロリ菌はどのように治療するのですか？

胃潰瘍薬と2種類の抗生剤を服用することで90%程度の除菌率が期待できます。副作用も一時的な悪心や下痢などで重篤なものではありません。除菌治療は原則として胃カメラを行って検査が陽性であればすべて保険適応です。いずれの疾患においてもピロリ菌除菌のみですべてが治癒するということではありませんので注意は必要ですが、長期的に特発性血小板減

ました。このしくみについては不明な点もありますが、胃粘膜萎縮に伴う酸分泌低下による鉄吸収阻害、ピロリ菌が増殖の際に栄養源として過剰に鉄を消費することなどが想定されています。最後に、特発性血小板減少性紫斑病です。明らかな基礎疾患がなく、血小板数が減少するため種々の出血症状をひき起こす病気です。血小板に対する自己抗体ができて、脾臓で破壊されるため、数が減少するとされています。ピロリ菌陽性の特発性血小板減少性紫斑病患者さんに除菌治療を行うと血小板数が増加することが報告されています。有効率は報告により異なりますが、50〜60%程度の患者さんで血小板の増加があります。従来の治療は長期的な副腎皮質ステロイド内服または手術による脾臓摘出であり、副作用や侵襲性に問題がありました。それに比べて安全性と有効性の面で画期的な治療法です。

少性紫斑病や鉄欠乏性貧血で悩まされている方は一度ピロリ菌の検査を受け、検査が陽性であれば除菌することをお勧めします。

今月の先生



岐阜市民病院 血液内科
笠原千嗣 先生

- 専門分野
造血器腫瘍化学療法、造血幹細胞移植
- 役職
血液内科部長
- 主な資格、認定
日本血液学会専門医・指導医
日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医・指導医
日本輸血細胞治療学会認定医
日本造血細胞移植学会造血細胞移植認定医
日本内科学会認定医・指導医
- 卒業年、主な職歴
平成8年岐阜大学医学部卒